

旅日記にみる近世末期の女性の旅

山本志乃

「旅の大衆化」への位置づけをめぐる一考察

Travel of Women in the Late Early Modern Period Observed in Travel Diaries: A Study on Its Positioning Relative to the "Popularization of Traveling"

YAMAMOTO Shino

はじめに

- ① 清河八郎著『西遊草』にみる抜け参りとその実態
- ② 中村いと著『伊勢詣の日記』にみる旅と遊興
- ③ 松尾多勢子著『旅のなくさ、都のつと』にみる旅と思想
おわりに―旅する主体としての女性

【論文要旨】

旅の大衆化が進んだ江戸時代の後期、主体的に旅を楽しむ女性が多く存在したことは、近年とくに旅日記や絵画資料などの分析から明らかになってきた。しかしながら、講の代参記録のような普遍化した史料には女性の旅の実態が反映されないことから、江戸時代の女性の旅を体系的に理解することは難しいのが現状である。本稿では、個人的な旅日記を題材に、そこに記された女性の旅の実態を通して、旅を支えたしくみを考える。題材とした旅日記は、①清河八郎著『西遊草』②中村いと著『伊勢詣の日記』③松尾多勢子著『旅のなくさ、都のつと』の3点である。

①は幕末の尊攘派志士として知られる清河八郎が、母を伴って無手形の伊勢参宮をした記録である。そこには、非合法な関所抜けがあらさまに行われ、それが一種の街道稼ぎにもなっていた事実が記されており、伊勢参宮を契機とした周遊の旅の普及にとまない、女性の抜け参りが慣例化していた実態が示されている。②は江戸の裕福

な商家の妻が知人一家とともに伊勢参宮をした際の日記で、とくに古市遊廓での伊勢音頭見物の記録からは、旅における女性の遊興と、その背景にある確かな経済力を確認することができる。③は、幕末期に平田国学の門下となった信州伊那の豪農松尾家の妻多勢子が、動乱の最中にあつた京都へ旅をし、約半年にわたって滞在した記録である。特異な例ではあるが、身につけた教養をひとつの道具として、旅先の見知らぬ土地で自ら人脈を築き、その人脈を故郷の人々の利用に供したことは注目に値する。女性の旅人の存在は、街道や宿場のあり方にさまざまな影響を及ぼしたと思われる。とくに、後年イギリスの女性旅行家イザベラ・バードが明記した日本の街道の安全性は、女性の旅とは不可分の関係にあり、江戸時代後期の日本の旅文化を再評価するうえで、今後さらに女性の旅の検証を重ねていくことが必要である。

【キーワード】近世女性の旅、旅日記、抜け参り、伊勢音頭、松尾多勢子

はじめに

十返舎一九の『東海道中膝栗毛』は、一九世紀初頭の大衆化した旅の様相を余すところなく伝える、代表的な戯作文学である。この作品には、主人公の弥次郎兵衛・喜多八をはじめ、さまざまな旅人が登場する。大名行列、子どもの抜け参り、太々講の講中、六部、巡礼、座頭、金毘羅参りに護摩の灰まで、街道を渡世とする人々もまじえて、弥次・喜多と滑稽な道中をくりひろげる。

『東海道中膝栗毛』には、もちろん女性もたくさん登場する。しかし、それはほとんどが、茶屋女や留女、飯盛女、遊女といった、旅人を迎える女性たちである。主体的に旅する女性は、瞽女や比丘尼、市子などの職能民が巡礼者に限られ、一般女性の旅姿はまったく描かれていない。

近世の旅における女性の位置づけは、これまでどちらかといえば、この作品にあるような、旅人を迎える側の立場でとらえられがちであった。しかし、『伊勢参宮名所図会』や『東海道五十三次』のような旅をテーマとした絵画には、旅をする女性の姿が数多く描かれており、職能民や巡礼でなくても、主体的に旅を楽しんだ女性が存在したことは明らかである。また、女性自身が書いた旅日記の発掘も進んでおり、女性の旅を特徴づける試みが一定の成果を生んでもいる。⁽¹⁾

しかしながら、女性の旅を体系的に理解するには、現時点において史料のうえで限界があるのもまた事実である。たとえば、各地に数多く残されている「道中日記」は、庶民の旅の詳細を知るうえで格好の史料であるが、これらの多くは、村を基本単位とする講の代参の記録である。講は、家の代表者である男性で構成されるため、こうした記録に女性の旅の実態が反映することはほとんどない。

そのような限られた情報のなかで、個人的な旅日記に垣間見える女性

の旅姿は、さまざまな示唆をあたえてくれる貴重な題材である。もちろん、旅日記を書く階層に偏りがあることは前提としなければならない。⁽²⁾ それでもなお、そこから女性の旅の実態を抽出したいと考えるのは、現在に至る「旅の大衆化」の流れにおいて、女性の存在が大きな意味をもっていると思うからである。

本稿では、上記のような史料上の制約をふまえたうえで、女性の旅を近世後半の「旅の大衆化」にどのように位置づけることが可能か、考察を試みたい。具体的には、清河八郎著『西遊草』、中村いと著「伊勢詣の日記」、松尾多勢子「旅のなくさ、都のつと」という三種の旅日記を題材として、それぞれに描かれた女性の旅の実態と特徴を抽出する。そしてそこから、女性の旅を支えたしくみとそのあり方を考えてみたい。

① 清河八郎著『西遊草』にみる抜け参りとその実態

(1) 『西遊草』成立の背景と旅のルート

『西遊草』は、幕末の尊攘派の志士として知られる清河八郎が、安政二年（一八五五）に母親を連れて伊勢参宮をした際の記録である。

清河八郎（一八三〇～一八六三）は、出羽国清川村（現山形県東田川郡庄内町清川）で酒造業を営む斎藤家に生まれた。一八歳で江戸に出て学問を修め、二五歳のとき昌平黌書生寮に入寮、このとき斎藤家とは別に一家をたてて清河八郎を名乗った。同年神田三河町に塾を開くが、火事のため類焼。翌年帰郷して、母亀代の多年の望みだった伊勢参宮を思い立ち、貞吉という供を連れて三人で全国を旅した。その旅程は、三月一九日に故郷を出立し、日本海沿岸を越後の直江津まで南下。信州の善光寺、名古屋を経て、伊勢参宮ののち、奈良・京都・大坂をまわって山陽道を西に進む。讃岐の金毘羅参詣をして、さらには安芸の宮島から岩

国まで足を伸ばす。帰路は東海道を東に進み、江戸見物を終えてから、北上の際に日光へも参拝。郡山、山形を経て、九月一〇日に帰郷というもので、全行程一六九日間の大旅行であった。

この旅日記の特徴として、詳細な記述が第一にあげられる。道中の景色や遭遇した人々、宿、飲食、名物などがのびやかな筆で綴られ、読むだけで当時の旅を追体験できる。また、日記とは別に、供の貞吉が記した出納記録〔清河八郎記念館所蔵の小山松勝一郎関係資料〕も、全行程を網羅してはいないものの残されていて、これらをあわせ見ることにより、旅の経済事情もある程度把握することが可能である。

八郎の生家は、村内における社会的な地位も高く、経済的にも比較的裕福であった。また八郎自身が文武に秀でた逸材でもあったので、彼の記述そのものを、当時一般の旅として単純に考えることはできない。しかし、彼と同郷の講の代参六名が、八郎に先立つこと約三〇年、文政九年（一八二六）に伊勢参りをした際の「伊勢参宮道中記」⁽³⁾をみると、旅の経路はほぼ同じであり、他の道中記の記述と比べても、『西遊草』に書かれた旅の慣行や飲食、宿泊などに、さほど特異な点はみられない。ここから、当時の伊勢参りがある程度パターン化され、基本的にはそれにのっとった形で八郎の旅も遂行されたと想定することができる。

八郎の旅で特筆すべきは、これが母を連れた無手形の旅、すなわち「抜け参り」だということである。関所における女改めは厳しく、身元を詳細に記載した手形が必要であったことは周知のとおりであるが、幕末期のこの頃にはこれらが形骸化し、関所抜けが慣例化していたようだ。⁽⁴⁾とくに伊勢参宮の場合、若者や奉公人たちによる無手形の旅の習慣があったため、本来は重罪であるはずの関所抜けも、さほどの罪悪感もなく行われたのかもしれない。

以下、『西遊草』の記載から、抜け参りの実態と背景について考えてみたい。⁽⁵⁾

（2）旅立ちと関所抜けの実態

『西遊草』の書き出しは、安政二年（一八五五）三月一九日、母亀代の出立にはじまる。

有雨。伊勢詣での期すでにいたり、昼頃より母は僕をいざなひ、雨をしのぎ、鶴ヶ岡にいたり、伯母なる政氏をうながし、あらかじめ同行の約をなす。されども子細ありて菅谷参詣と世間に披露せるゆへ、別にわかれの酒宴もひらかず。⁽⁶⁾

八郎の出立は翌日の二〇日、ひと足先に母と供の二人が鶴岡に向かった。行き先は母の実家、鶴岡の富商として知られる三井弥吉家である。「伯母の政」とあるのは、母亀代の長姉で、婿をとって三井家を継いでいた。

ひとまず実家をめざしたのは、この旅が伊勢参宮ではなく、越後にある菅谷不動（新潟県新発田市の菅谷寺）への参詣を名目としていたことによる。菅谷寺の不動尊は眼病にご利益があることで知られており、八郎の母も先年眼をわずらったことから、旅立ちには自然な理由であった。三井家の政は、この菅谷不動までを同行する約束になっていた。

手形を持たない抜け参りの場合、制度上違法にあたるこれを公表することはできない。したがって、長期の旅に出立する際の慣例だった坂送りなどの酒宴も、ここでは行われていない。このように、比較的近距离の社寺参詣を理由に旅に出て、体調がよかったのでそのまま伊勢まで行くことにした、といういいわけは、抜け参りの常套手段である。おそらく周囲の人々も、こうした事情は充分察知したうえで容認していたのであろう。抜け参りそのものもはや慣例化していたことのひとつのあらわれといつてよい。

八郎たち一行は、その長い旅路の途中で、複数箇所を関所を抜けている。出発からおよそ一ヶ月たった四月半ば、越後と信濃の国境にある関川の関所にさしかかる。

新井より善光寺には十五里ならであらざれば、男子の足ならばその日の中にいたるべきに、六里さきに関川の番所ありて、婦人を通さぬゆへ、いづれも関川にやどり、早天にしのびいづるなれば、女人連はやくともかならず関川に一夜をあかすなり。⁽⁷⁾

時間的にはまだ日も高く、その先まで歩みをすすめることができたが、関所の手前で一泊することを余儀なくされたという。関所を手形なしで抜けるため、ここに宿泊し、早朝にこっそり通過する必要があったからである。

関所の脇には抜け道があり、その道案内を担っていたのは関川の宿の案内人たちであった。つまり、関川の宿場では、関所抜けをする人を泊め、その道案内をすることが、生業のひとつとなっていたわけである。

八郎の記録には、「関川より宿引多くいで、いろいろのいつわり申ふらし、あるひは人によりていろいろをどしなどいたし、にくむべきありさまなり」とある。とくに女性連れの一行に対して、関所抜けの恐怖をことさらに語り、強引に客引きをするさまがみてとれる。さらに、この日、越後から善光寺参りにきた一三人の女性たちと同宿した八郎は、この女性たちの供の男から、関所抜けに同行させてほしいと頼まれる。初めての旅であった女性たちは、宿引きの大仰な脅し文句を真にうけて、関所抜けをしり込みするほど動揺してしまったらしい。

翌朝、八郎一行と善光寺参りの女性たちは、宿の案内で暗い細道を通り、関所の柵木をぬけた。この関所は上り下りともに女性に厳しく、そのため下りの場合も野尻の宿に一泊し、夜明け前に抜ける必要があった

と書かれている。「是又天下の憐れみなり」という八郎の記述からは、関所抜けそのものが、公儀にとっても暗黙の了解となっていたことをうかがわせる。

その後、木曾福島の関所をさけて脇の往還を行き、飯田の先の初瀬（市ノ瀬）の関でも脇道を抜ける。「一体女人道の事ゆへ、唯名のみにして、関所を眼下に見落としながら通るなり」とあり、やはり公然と関所を抜けていることがわかる。

七月半ば、伊勢参宮を終え、西国をまわった帰路、東海道の気賀で関所越えとなる。ここは新居の裏番所と呼ばれる関所であったようで、船を使つて浜名湖東岸の呉松に抜けることになっていた。ただし夜でなければ船が出ないので、関川と同様に、早い時間から宿をとらなければならなかった。また、この日七月一九日の記述には、新居の関所が前年の津波で大破損し、そのため湖の往来にたいへんな支障をきたしていたことがあわせて記されている。

すべて女中をしのび越にいたすゆへ、何事も不法の言葉多く、呉松迄僅二三里の所を五里ほどに申ふらし、壹艘にて壹分などといういろ高大にいたすゆへ、隣坐にある名古やの男女、我坐にきたり、とてもねだりがましきゆへ、陸を歩むべきよふ懸合、可然とてありしに、終ひ船頭壹人にいたし、鳥目壹貫文とさだむ。女をつれては何かたにても無理なる事ばかり申ふらし、余程気を用ひずば、多くは人のあざけりにあふなり。⁽¹⁰⁾

女性の関所抜けが慣例化していたことに伴って、その弱みにつけこむ荒稼ぎもまた、横行していたことがうかがえる。女性の旅に必ずといってよいほど供の男性を必要としたのは、こうした応酬に備えてのことであったとも考えられる。

氣賀の関を抜けた四日後には、箱根の関所を通過する。箱根は、上りの女性に対して厳しいが、下りについては改めがなかったようだ。関所を越えた先には人家があり、「竊に関所の往來人を助る所とぞ」⁽¹¹⁾とある。天下第一の関門とはいえ、関所抜けの常習化に変わりはないということであろう。

江戸見物をすませ、八月末には日光街道の栗橋の関所に至る。関所手前に抜け道があり、利根川越えに百文を払わされた。「しのびの体なるより、よりどころあらず」⁽¹²⁾と、これもまた仕方ないこととしている。

抜け参りの記録として『西遊草』を早くから評価し、分析している深井甚三は、他の抜け参りの記録も傍証した結果、多くの関所において、抜け参りや女性旅人のためのなかば公然となった抜け道が、一八世紀中頃の宝曆・天明期にはすでに開かれていたことを指摘している。⁽¹³⁾

実際に、『西遊草』の記載からは、非合法的な関所抜けがあからさまに行われ、それが一種の街道稼ぎにもなっていた実態をよみとることができるといえる。江戸時代の後半期においては、女性の関所抜けが、もはや旅のシステムのひとつとして確立していたとみてよいであろう。

(3) 八郎がみた女性の旅

『西遊草』には、ところどころで、八郎母子が遭遇した他の女性の旅のようすが垣間見られる。

まずは母亀代の実姉である伯母の政である。政は越後の菅谷不動まで同行する目的で、鶴岡から一行とともに出立した。しかし八郎の本意は、政をその先の長い旅に連れ出すことにあった。

伯母政氏は婦人といへども万事に達し、平常の男子の及所にあらず。故に夫に別れしより四人の子供を養ひ、専ら家事を引受、男子の任を以て渡世いたし、いろいろの難苦にあひ、終始安心の時もなく、

病に身をたしなめ、毎に憂を懐くのみ。朝暮鬱々として光陰をいつ果べき期もあらで、憐れのいたりなり。⁽¹⁴⁾

伯母の政は夫の死後、一家の柱として家政を切り盛りし、たいへんな苦勞があつたようすがうかがわれる。そのため八郎は、このたび母を伊勢参宮に連れ出したのを機に、少しでも伯母の憂き晴らしになればと、同行を勧めたのである。

しかし政は、持病や家族への遠慮もあつてあまり乗り気でなく、さらには参宮に出立したらしいことが本家に知れ、当主が立腹しているとの知らせにますます気弱になってしまう。八郎の勧めで新潟までしぶしぶ同行したものの、故郷のようすばかりが気になって一向に楽しむ気配がない。ついにはここで帰郷することに決め、八郎も強いてひきとめることもできず、政は鶴岡に帰って行った。

こうした伯母の一連の行動からは、やはり女性の長旅が、講の代参ほどには社会的に認知されていなかったことを思わせる。村の公的な任務として行く代参と、行程としてはほとんど違いがないにもかかわらず、女性の旅はきわめて個人的な、遊山の域を出ないものとしかたえられなかったというところであろう。長期にわたって家をあけることが許されないほど、家の中の政の存在が重要な位置にあつたということもあるだろうが、旅に出るのはやはりそれほど簡単ではなかったことがよくわかる。

また、新潟の旅館「松木や」の女房が、八郎一行を送りがてら善光寺参詣を思い立つくだりがある(巻の二)。町役人を務める主人が留守のため、一行を送りに出た松木やの女房は、二日ほどたったところで、善光寺まで同行したい旨を申し出る。八郎は驚いたものの、母の話し相手にもちよほどよかろうと、申し出を受け入れる。ただし、不意に出てきてしまっているので、家にことわりを入れなければならず、八郎はいき

さつを書いてこれを松木やに送る。

松木やの女房の行動は突発的で、八郎も「いわゆる連にひかれて善光寺まひりとやら」と書いているが、こうしたきつかけで旅立つ場合もあつたのであろう。しかしこの女房は結局、出雲崎まで来たところで家の使いの者に追いつかれ、帰るよう諭されて、善光寺参りを果たさないままやむなく帰路につくことになる。伯母政と同様に、一見奔放にみえながら、女性の旅にはさまざまな制約がついてまわつたことを思わせる。

こうしたことを、当の八郎も、自身の母親の身におきかえ、つぎのよう

に述べている。

母は入らぬ事にのみ心配ありて、一向に伊勢参も致さずある故、此義を深く計らひ、今度同道いたし、西遊せしに、幸ひあますところなく、且不自由も致さず、帰家にもむくは元より家の為とはいひながら、一旦の決断による事なり。

我親類中にも万金を重ぬる家の母たるものは、一寸もさきにいづる事能わず、さりとして窮人民「を」救ひ施し、正義を志にもあらで、いたづらに今日の利慾にのみ心を用ひ、空しく黄金の守と相成、人間界の楽しみもしらぬものままあり。憐れむべきのいたりなり。⁽¹⁵⁾

この当時の家における女性の立場からみると、やはりまだ旅立ちそのものに大きな決断を必要としたことがわかる。おそらく、八郎の申し出がなければ、母は伊勢参宮の旅を経験することなく一生を終えたのではなからうか。

このように、長期にわたる女性の旅が、多くの制約や条件のもとで、限られた人々により実行されたことを思わせる一方で、八郎の記述には、そうした人々とは別種の、旅をする女性グループに出会う場面がある。ひとつは前述した関川の関所抜けで出会つた、越後からの善光寺参詣の

女性グループで、男性の世話役がひとり同行している。また伊勢では、地元酒田から来た女子連と偶然に行き会ふ。これにも男性の世話役がひとりついていたようだ。

女性だけのグループによる旅の慣行について、山本光正は近代以降の善光寺参詣絵馬などからこれを分析している。山本は千葉県夷隅郡岬町（現いすみ市）鴨根の清水寺に奉納された明治・大正期の絵馬二六点から、平均して十数名、多い場合は三〇名以上のグループによる善光寺参詣（その多くが日光参詣を伴っていたと思われる）が行われていたことを明らかにし、「絵馬の奉納はなかつたものの、女性の善光寺参詣は近世にまで遡ることができると断定してよいだろう」としている。⁽¹⁶⁾

彼女たちがどのようなシステムで旅に出たのかは不明であるが、旅日記を残すような富裕層に属する女性たちとは明らかに異なる人々であったと想像でき、旅する女性たちの層の厚さを思わせる。八郎が出会つたのは越後の女性たちだが、今後、各地域の史資料を発掘・分析することによって、近代以降にまで引き継がれた女性グループによる善光寺参詣が、地域的にどういった広がりをもち、どのような頻度で行われていたのか、明らかにする必要があるだろう。それによって、大衆化へとつながる女性の旅の実態が、自ずと示されるように思われる。

八郎が伊勢で会つた酒田の女子連たちも、御師の屋敷に宿泊しているようすはみうけられず、また伊勢音頭の見物に訪れていないこと、二見から船で三河の吉田へと渡つたようすなどから、当時一般的だった講の代参システムとは異なる旅の形態であつたと思われる。こうしたことも含めて、女性の旅を多面的に理解するうえで、今後のさらなる分析が必要である。

② 中村いと著「伊勢詣の日記」にみる旅と遊興

(1) 旅立ちの背景と旅のルート

「伊勢詣の日記」は、江戸で御畳方御用達を代々勤める中村弥大夫家の嫁、いとが、文政八年（一八二五）に伊勢参宮をした際の記録である。¹⁷いとが生年などの詳細は不明だが、中村家に嫁したのが文化二年（一八〇五）であり、当時の一般的な嫁入りの年代から推測すると、旅に出たときは三〇代後半だったと思われる。

旅立ちのきっかけについては、日記の冒頭に記載がある。南伝馬町の親戚を訪ねた折、この親戚の娘の嫁ぎ先である天満屋（木挽町、矢田市郎兵衛）の姑みをやつてきて、今年に伊勢太々講で息子が参宮するので、自分も都めぐりをかねて行くことになった、という。ついでに、男の中に女ひとりで行くのもわびしく、だれかよい道連れはないものかと思っていたところなので、ぜひ一緒に行かないか、というのである。いとしにしても、かねてより伊勢参りをしたいと思っており、ちょうどよい機会であった。さっそく当主に相談して許しをもらい、同行の運びとなつたわけである。

この冒頭部分には、いと自身の旅の経験や旅へのあこがれがづづられていて、伊勢参宮に至る背景がわかるとともに、当時の女性が置かれていた状況についても言及されている。

日記によれば、いとは娘時代から、江ノ島、鎌倉、金沢といった江戸近郊の名所を訪れる機会が多くあり、いずれ都大路や須磨明石の浦へ行ってみたいとあこがれを募らせていたようだ。

年のそひ行にそひて み子たちも多くて 手わさいとなみもしげければ 宮寺に詣するもこゝろにまかせず 少しも静にいとまある時は 名所図絵などいふ文くり返して その所にあそぶのおもひをなせり

嫁いでは、子育てや家事に忙しく、社寺参詣もままならなかったであろう。また、思うように外出できないかわりに、名所図会をながめて旅をした気分にはたっていたという。名所図会の果たした役割や読者層を考えるうえで興味深い記述である。

百里をへたてし旅路の ことさら女子の身なれば 身にかなひたる 道つれのあらではおもひくわ立かたく とにもかくにも女子の身の こゝろにおもふのみにて かなはぬ事多かる世のならひとくわん しくらしぬ

旅も遠路となると、女性の場合ほとくに、適当な道連れがなければ実行が難しかったことがうかがわれる。また、「こゝろにおもふのみにてかなはぬ事多かる世のならひと」という記述からは、前章でもふれたように、女性の旅には世間体や社会観念といったさまざまな制約がついてまわったことを思わせる。

旅程は、三月一三日に江戸を出立、東海道を西に進み、半月後の四月一日に伊勢に到着している。その後は奈良、和歌山を経て、船で瀬戸内海を行き、金毘羅参詣、安芸の宮島、岩国の錦帯橋まで足を伸ばす。帰路は大坂、京都で数日滞在し、中山道に出て善光寺の開帳に参詣、六月四日に江戸に帰着している。全行程八日間、同行者は、天満屋の市郎兵衛、みを、手代のほか、いとの子供もついたようだ。前述したように、この旅は天満屋の市郎兵衛が太々講で伊勢参宮をすることを第一の目的としているので、通行手形などの手続きも整っており、先の『西遊草』でみたような抜け参りではない。

日記に記された旅程は、当時一般的だった東国からの伊勢参宮の旅とほぼ同じで、とくに逸脱したところは見られない。金銭の出納の記録がないので詳細は不明だが、宿泊は御師邸もしくは旅籠を利用しており、

京都や大坂で芝居見物を兼ねてしばらく滞在するなど、裕福な町人にふさわしい旅であったことがうかがえる。

また、瀬戸内海では船中ですぐす日が続き、初めのうちは慣れないため、眠れないなどの体調不良を訴える記述がある。しかし船での移動は効率もよく、次第に慣れて、赤穂近くで上陸するときには「しばし馴し人々なれば 別るゝも心ほそし」と、同船の人々と別れを惜しまずになつていたようだ。

大雨や嵐にあうなどの難儀はあったものの、日記の最後にいとが記した「伊勢まうてよし野たつたに須磨あかし安芸もさぬきも見てきそ路かな」という歌を見れば、当時の伊勢参宮としてはフルコースの旅程を遂行して無事帰着した満足感が十分に伝わってくる。

(2) 御師によるもてなし

四月一日から六日まで、いとを含む天満屋一行は、伊勢の内宮御師、藤波神主のもとに滞在した。藤波は禁裏御師をつとめる格式高い御師である。

いとの日記には、滞在中の御師によるもてなしが詳しくつづられている。そしてそれは、伊勢に入る前日、櫛田の宿に手代が来るところからすでに始まっている。

ふじ波よりも手代来り 鯛二まい あわひ十はかり進物とて贈りぬ
いとあたらしにて調理す (三月二十九日)

藤波の手代が、鯛とあわび持参で櫛田の宿に迎えに来たようすが記されている。翌日には駕籠が仕立てられ櫛田の旅籠を出発、宮川を越え、まず二見浦に行く。ここでも「山のうへの茶店にてさげ重などとり出休らひつゝ」とあり、酒肴が用意されたようだ。その後藤波邸に到着する

が、初日のこの時点でのいとの感想は、「種々馳走ありてうるさし」。あまりにも次から次へと続くもてなしに、いささか辟易しているようすがうかがえる。

翌四月二日は、内宮の参拝。念願の伊勢参宮を果たしたことに感無量で、旅を許してくれた当主に感謝し、中村家の安泰と繁栄を願っている。

神主のもとに帰りぬれば 七五三の料理とて種々さまざまなり
かねて聞しごとく太々講中へは御師よりの馳走はことに美をつくすといひしが さることにてとりならべたる数多きを見るばかりなりける 無益の事なりといふべし

御師邸での飲食は、本膳形式の豪華なものだったことがさまざまな記録からうかがえる。例えば、弘化五年(一八四八)に讃岐の志度ノ浦講中が記した「伊勢参宮献立道中記」⁽¹⁸⁾をみると、本膳から四の膳まで白木の膳で供され、全部でなんと一一もの膳が用意されたようだ。そこには「鶴」が食材として登場し、大名の献立に準じた饗応であったことがわかる。「絹揃い夜具四十枚」といった記述もあり、御師邸でのもてなしが並外れたものであったことがうかがわれる。

いとの日記で興味深いのは、これを「無益の事なり」としていることである。次々と出される料理も、手をつけずにただ見ているばかりで、あまりにもつたいないと感じたようすがありとわかる。このあたりは、いかにも生活感覚に敏感な主婦らしい感想である。

その翌日は、駕籠で朝熊山に行き、金剛証寺に参詣する。「山のうへには 藤波より弁当酒肴とり揃へ待出てちそう多し」とあり、鳥羽の七鳥を見渡す絶景に酔いしれながら、御師が用意した酒肴を満喫したようである。山から下りて外宮に参拝したあとにも「御師よりまたまた迎ひ出て待居りて 茶屋にていろいろ馳走す」とある。まさに至れり尽せり

のもてなしぶりである。

御師の饗応は、伊勢出立の当日まで続く。駕籠で出立し、新茶屋まで送りに来て、ここでまた「色々馳走なり」と最後の酒肴が用意された。「いろいろ手間とり 松坂とまりとなる」とあり、この日は別れの宴に一日を費やしたようだ。

いとたち一行は、このように御師による過剰とも思えるもてなしを受受して、六日間の伊勢滞在を終えている。はじめこそ、わずらわしさを覚えていたように見えるが、伊勢出立の頃にはかなり満喫したようすがうかがえる。それには、後述する古市での伊勢音頭の見物が大きく関わっている。女性の旅人にとって伊勢での遊興がどのような意味をもっていたのか、さらにみてみたい。

(3) 伊勢音頭の楽しみ

いとの日記には、伊勢到着の翌日から、古市での遊興についての記述がある。内宮への参拝をすませたのち、「夕かた皆々つどひ出て ふる市備前屋といふへおどり見にとて行にともなはれて興しあへり」と、まずは大樓のひとつである備前屋にでかけている。

古市は、伊勢神宮の内宮と外宮との間にひらけた遊廓で、一八世紀終りの天明年間頃には、人家三四二軒、妓楼七〇軒、寺三所、大芝居二場という規模をもっていた。¹⁹⁾『伊勢参宮名所図会』の記載によると、そもそも伊勢音頭は、この地で歌われていた川崎音頭が転じて座敷歌となったものであるという。

曲亭馬琴の『鞆旅漫録』（享和二年（一八〇二））には、「古市の総評」として詳しい記述がある。それによると、妓楼の入口には暖簾が二重にかけてあり、名目上茶店であることから、見世の隅に茶釜がひとつかけられている。客が来ると、遊女が一五人から二〇人ばかり残らず出てきて並び、座敷で酒盛りがはじまる。そのうち二人が三絃を奏で始め、

遊女たちが同音でうたう。これがすなわち伊勢音頭であり、『伊勢参宮名所図会』の「古市」の挿絵にあるような、遊女による輪踊りが行われたのである。客はこれを見ながら敵娼あいかたを決めるが、直接のやりとりではなく、仲居を通して決めるシステムであったようだ。『東海道中膝栗毛』の五編追加（文化三年（一八〇六））には、上方のこうしたシステムを知らない弥次・喜多が、遊女をめぐって上方者といざこざを起す一幕がある。

このように、古市での伊勢音頭は、少なくとも一九世紀初頭の段階においては、いわば張見世の役割を背景にもちながら座敷芸の延長として上演されていたものだが、いとの日記や、先にあげた『西遊草』、「伊勢参宮献立道中記」などの一九世紀半ばに描かれた日記には、この伊勢音頭のみを単独で観覧する遊びが定着していたようすが記されている。たとえば「伊勢参宮献立道中記」（弘化五年（一八四八））にある妓楼「油屋」での見聞録は次のとおりである。

仲居に伴はれて音頭の間に入れば、二十畳ばかりの座敷にして、正面より右手への廻り縁なり。毛氈を敷きし上に連中坐す。其の前に鼓形の菓子器に盃に定紋の笹丸入れし菓子を盛り。〔中略〕歌はじまりしばらくして簾あぐれば、八角形の挑燈（ふち朱ぬり藍にて水のもやう紅にて盃あぐく）七つ、簾あがると、ひとしく内より針金にて出る仕かけなり。しきのかたにころがし置きたるらんかん起き上る。蠟燭多く、らんかんの先へともる。簾の奥は麻にして、水に盃の模様花やかにゑがきし幕をはりたり。かの幕にそへて朝がほの燈火、紅あげにて水に盃のもやう九つともし重れば、其の間白昼の如し。十五六歳の女、萌黄羽二重水盃のもやうの鬘斗目、帯は黒びろうど金糸水盃のぬい、緋鹿子の襟かけ、以上四人皆振袖、あとは皆つめ袖にして、襟かけなし、衣装は同様なり。踊女惣人数十七

人、地方六人皆同様の衣装也。唄の合にてヨイく、ヨイくヨイヤサくと同音に掛け声す。唄も大体すむころ、先へ出し分二三人は彼のまん幕の方へ入りしくらゐにて簾一同に落つ。⁽²⁰⁾

「音頭の間」という廻り縁のある二〇畳ほどの専用広間があり、客は毛氈の上に座って菓子などをふるまわれる。やがて簾が上がると、針金の仕掛けで提灯が現れて、欄干が起き上がる。背後には幔幕が張られ、揃いの衣装をつけた踊り手が十七人ほど登場し、地方の演奏にあわせて踊るといふ。大がかりな舞台装置と演出は、もはや座敷芸というより、「伊勢音頭ショー」とでもいふべき一種の舞台芸能である。

同様の記述は、『西遊草』（安政二年（一八五五））にもある。ここに記されている妓楼も同じ油屋である。

まず音頭の座敷は別にしつらい、中二階にて、三拾畳ばかりも敷かる床など奇麗なり。廻り縁側にて、客人を床の前毛氈のうへに居へ、名香をもやし、左右に三人づつはやし女いづるなり。三味線五丁、琴と胡弓なり。歌はじまりて座敷中鳴動いたし、人ごころ何ものいづるやらんと思ひしに、朱ぬりの欄干擬宝珠付にて蠟燭をならべ、下より引揚るなり。其仕懸奇麗にして、誰人もこころを浮さぬものもなし。それより同衣服の女、左右の椽下より踊りながらいづる。暫らくして中にて合ふ。それより踊ながら左右に身をちがへ、自然と椽の下にくだるなり。此にて歌曲やむなり。⁽²¹⁾

やはり専用の広間があり、欄干が起き上がるなどの大がかりな舞台装置と、揃いの衣装をつけた踊り手のようすが記されている。先述したように、八郎の旅は母の亀代を連れての旅であり、この油屋へも、母と供の貞吉と三人で訪れている。八郎の記述には、「其あたへ僅壹両にて、

拾人にもおなじく、我等は三人ばかりゆへ至てゆるゆるして楽しみき」とあり、観覧料が一グループにつき一両という設定であったことがわかる。

では、こうしたショー化した伊勢音頭の上演はいつごろから始められたのだろうか。『西遊草』の続きに、こうある。

我先年いたるときも、杉本にて見しに、今に比すれば誠に疎籠なる事なりしに、焼失已後、いづれも美をきそひ、終ひに右の仕懸をいたせしとぞ。⁽²²⁾

「先年」というのは嘉永元年（一八四八）のこと、八郎は伊勢を訪れ、古市の大楼のひとつである杉本屋に遊んだ。そこで見た伊勢音頭は、このたびのものとは比べてさほど凝ったものではなかったようである。もちろん、それぞれの妓楼で趣向は異なるであろうが、「焼失已後」とあることから、火災で再建する機会があり、その際に大がかりな舞台装置を備えた専用広間を設けたことがうかがえる。古市では、嘉永六年（一八五三）六月に大林寺から出火した大火があり、⁽²³⁾八郎のいう火災とはこのことであろう。

ところで、郷土史家の野村可通が著した『伊勢の古市あれこれ』には、「備前屋五代目の当主が、寛政六年（一七九四）、町内の一虎という彫刻師に工夫せしめたのが、せり上げ式舞台の始め⁽²⁴⁾」という聞き書きが記されている。『宇治山田市史』⁽²⁵⁾には、寛政六年七月に古市一帯が焼ける大火があったことが記されており、おそらくこの頃から一九世紀半ばにかけて、いくたびかの火災を契機として、順次各妓楼が競うように専用舞台を特設したのである。幕末頃の浮世絵には、玉蘭斎貞秀画「備前屋伊勢音頭の図」や歌川広重画「伊勢名勝古市伊勢音頭」などに、舞台芸能としての発展をとげた伊勢音頭のようなすが描かれている。

いとが古市を訪れた文政年間の頃に、こうした大がかりな舞台があったかどうかは、日記を見る限りはよくわからない。しかし、備前屋に行った翌日には柏屋にも足を運んでおり、伊勢音頭の観覧を目的に、あちらこちらの妓楼を巡っているようすがわかる。さらにその翌日には、遊女たちを引き連れて芝居見物にも興じている。「天満屋のとははいとはでやかなる女子にて、女郎芸者やうのものにもものくれなとすればなり」とあり、天満屋のみをが遊女たちに大盤振る舞いをしたという。男性の遊興空間と思われがちな遊廓で、女性がこうした遊びに酔狂するさまは、それ自体興味深い。

いととは、伊勢滞在の最終日にこう記している。

此ころ二三日は世に云伊勢をんどのおどりは、あくまで見たりよききりやうなる子供女子も多し、若き男のうつ、ぬかすもことほりと云へし、女子にて見てはいとおかし

せり上がり式舞台の有無は別としても、ショー化した舞台芸能としての伊勢音頭が、いとやみをのような女性の旅人をも遊廓の客として招き入れたことは確かであった。母を連れられた清河八郎も、伊勢音頭を評して「天下無双めづらしき興なり」「三都とも見られぬ奇妙の見物なり」としており、他に類例のない芸能であることを強調している。

遊廓で生まれる文学や芸能、高級遊女のファッションなどは、女性にとっても最先端の流行として興味をかきたてられるものであり、江戸見物をした女性の旅日記には、新吉原で昼見世を見物したことも記されている。⁽²⁶⁾ 古市の伊勢音頭は、そうした女性の指向を核的にとらえた、きわめて巧みな集客装置であった。そしてそのことはまた、この当時、旅人を迎える側にとっても、女性の旅人が無視できないほど大きな存在となっていたことを示しているともいえるのである。

③ 松尾多勢子著「旅のなくさ、都のつと」にみる旅と思想

(1) 都への旅立ち

松尾多勢子は、信濃国伊那郡伴野村（現長野県下伊那郡豊丘村）の豪農、松尾元珍の妻で、幕末の文久二年（一八六二）に京都へ旅をした。「旅のなくさ、都のつと」は、出立から半年におよぶ都での滞在を記した多勢子の日記である。⁽²⁷⁾

この日記は、書かれた背景や旅の動機からみて、先述の『西遊草』、「伊勢詣の日記」とは趣を異にしている。先の二点はいずれも、伊勢参宮を契機とした周遊の旅だが、多勢子の場合は京都滞足を目的とし、しかも多分に思想的な動機を旅立ちの背景にもっているからである。

しかし、ここであえて多勢子の日記をとりあげるのには、以下の理由による。まず、多勢子の旅が、多勢子自身の強固な決意によって実行に移されたこと、次に、往復こそ連れを伴ってはいたが、幕末の動乱期にあった京都に単独で乗り込み、自ら築いた人脈を頼りに、約半年にわたって滞在をつづけたこと、さらには、この旅で得た情報や人脈が、その後の多勢子の人生に多大な影響を与える結果となったことである。特異な旅ではあるが、近世末の女性の旅の一例として、特筆に値すると思われる。

多勢子は、文化八年（一八一二）、伊那郡山本村（現長野県飯田市）の竹村家に生まれた。竹村家は、先祖が飯田城主の坂西長忠の家臣と伝えられる豪農で、多勢子の父は近隣の座光村の庄屋、北原家から竹村家に婿養子に來ている。⁽²⁸⁾ 多勢子は、一二歳から嫁に行くまでの七年間をこの北原家で過ごし、当主が開く寺子屋での手習いのほか、裁縫や糸繰り、礼儀作法、さらには漢学、算術、和歌の基本などを習得した。

元来向学心が旺盛だったのに加え、母方の曾祖母、桜井知栄が藩主に

まで名の聞こえた歌人であった。⁽²⁹⁾そのため、和歌は多勢子にもっともなじみ深かったようだ。伴野村の豪農松尾家に嫁いでのちも、北原家で催される歌会にしばしば顔を出しては、研鑽を積んでいたとされる。⁽³⁰⁾

その歌会で、多勢子は、国学者岩崎長世の警咳に接した。長世は平田篤胤の門下で、はじめ江戸において、嘉永五年（一八五二）頃に飯田にやってきた。それ以前から、国学と和歌を学ぶ土壌は、飯田周辺の豪商、豪農層の間に広がっていたが、新しい師の長世の登場で、復古神道と祭政一致を唱える平田門下の学風が、幕末の伊那一帯に浸透したのである。

多勢子が、歌道をこえて平田国学に深く心酔するようになったのは、旅立ちの前年、すなわち文久元年（一八六一）の頃である。この年多勢子は、篤胤没後の後継者である平田鏡胤の門下生として、正式に名を連ねた。

当時、平田国学を信奉するということは、幕藩体制を批判し、尊皇攘夷の思想へと傾倒することを意味した。とはいえ、当初の多勢子にどれほどの「勤王」の志があったのかは、じつのところ定かではない。

後年多勢子は、没後一〇年近くを経た明治三六年（一九〇三）に、維新に功績があったとして正五位を贈られている。以来、昭和の戦前期まで、多勢子は「勤王の女志士」という代名詞で語られ、その名を知られてきた。しかし、それは時代が与えた評価であって、必ずしも彼女の実像を伝えるものではないと考える。

幕末のこの時期、多勢子が現状の世の中に大きな不満を抱いていたのは確かであった。それは、開国後に不利な条件のもとで開始された西洋諸国との貿易が、国内経済を混乱に陥れたことにひとつの理由がある。とくに、輸出品の八割以上を占める生糸は、廉価で大量に取引されて生産農家に打撃を与えていた。養蚕は松尾家の重要な家業であり、多勢子はその主要な担い手であった。⁽³¹⁾そうしたなかにおいて、平田国学が唱える古代王政への復古思想は、ユートピアの実現のような幻想を、多勢子

に抱かせるに十分であったと思われる。そしてそれが、おそらく多勢子を都への旅に導いた、直接の要因であった。

「女丈夫」と周囲に評される多勢子は、かなり直情的で、思ったことはやり遂げないと気のすまないたちだったらしい。都への出立にあたって、北原家に宛てた書簡には「又々やまひおこり、遠方迄参り候へとも」という記述がある。旅に出ることへの抑えがたい思いが、まるで病気のようだと自覚しているのである。行き先の京都は、尊攘派の本拠地であり、平田学の門人も多くいた。長年和歌をたしなんでいた多勢子には、一度は訪れてみたい憧れの地でもあった。

多勢子は五二歳であった。七人の子どもたちはすでに成長しており、家のことは長男夫婦に任せて、長期間留守にすることにさほどの困難はなかったものと思われる。家人に対しては「歌の修業」を表向き理由に、しかし周囲にはそれとは知らせなかったようだ。抜け参りと同様、ひとまず山本村の実家に行つて里帰りのようにふるまい、そこからひそかに都へと出立している。

文久二年の八月はつかまり三十かといふに、秋風のさそふまに／＼おもひ立ぬ。明るを待て、産土の神又とふつ親のみたまにとて、かへらんまてのぬさ奉り、雨いとふれと、ぬるゝも物かはとからふしてなし野といへるたむけをこへつゝ、

旅衣ふりかへれとも秋霧の立へたてたる古さとの空からふして清内路の里にいたりぬ。⁽³²⁾

「旅のなぐさ」冒頭の記述である。講の代参に見られるような盛大な見送りなどはなく、夜明けとともに産土の神と先祖の墓に詣でて、誰知るともなく旅路についたようすがうかがえる。

この日は、朝から雨であった。清内路越とよばれる脇往還を行くと、

途中で市岡男也という縁戚の男が待っていた。ここから峠を越えれば中山道で、中津川の宿場まで、竹村家から連れてきた下男にかわり、この男也が供をしてくれる約束になっていた。茶店で昼飯と酒を少しばかり所望して、さらに歩みを進めた。

申の刻（午後四時頃）過ぎに、中山道の橋場に着いた。雨はひどく、駕籠も見つけれないままに、十石峠で日が暮れてしまった。泊まろうにも宿はなく、困りきったところへ、馬を引く人の姿が見えた。渋る馬子に無理を言っただけで乗せてもらおうとそれは老馬で、濡れて疲れたその姿に多勢子は思わず自分を重ね、「年を経し足けも弱き老うまの馬籠の馬に背負はれて行」と詠んでいる。

馬籠宿を過ぎ、提灯を借りて、暗闇に谷川の瀬音を聞きながら、戌の刻（午後八時頃）過ぎに中津川の本陣、市岡家に着いた。市岡家は、実家竹村家の縁戚にあたり、多勢子の娘もまたこの家に嫁いでいた。多勢子の来訪は突然であつたらしく、家の者たちの驚いたようすが日記の記述に見える。雨の中、着物を濡らして現れた多勢子に、市岡家の人々はあれこれと問いただしたようだ。

市岡家の者たちに引き止められ、一〇日ほどをここで過ごしたのち、九月一〇日に再び出立した。懇意にしている京都の染物店伊勢屋の手代が、中津川での取引を終えて帰るといので、同行してもらうことになったからである。大久手、御嶽、鶴沼、赤坂、草津と、木曾街道の宿場を進み、九月一五日に京都に到着した。

（2）都での滞在

京都では、中津川から同行してきた手代が勤める染物店の伊勢屋が、客分扱いで身柄を引き受けてくれたので、ここにひとまず落ち着いた。当初はさほど長い滞在になるとは考えていなかったようで、伊勢屋を足がかりにしばらくは都見物に明け暮れている。

その間、京都の平田派門人たちと知己を得て、嵐山の紅葉狩りに出かけたり、女流歌人の太田垣蓮月に紹介されるなどしている。また公家の白川家で催される歌会にも誘われ、伊勢屋から着物を借りて参上した。天皇家ともゆかりの深い白川卿とじかに接し、夢見心地であったことが日記の記述にも見える。

このように、京都滞当初は、名所を巡りながら歌三昧に過ごす日々がつづられており、旅の動機とされる思想的な背景はほとんど感じられない。しかし、平田派門人たちと親しくなるにつれ、多勢子の都での日々は別の意味を持ち始める。

多勢子は都の名所をさまざまに巡っているが、それは単なる遊山ではなかった。当時、天皇陵やゆかりの人々の墓所の多くは荒廃し、古神道を信奉する平田派の者たちは、これを探して整備することを使命と考えていた。多勢子は、友人たちと近くの山に足を運んでは、藪に埋もれた陵墓探しに躍りとなった。その荒れ方は想像をはるかに超えており、天皇家疲弊のうわさを実感し、平田派門人として自らがなすべきことを次第に意識するようになったと思われる。

やがて都到着から半月が過ぎた。多勢子は居候を続けていた伊勢屋を出て、近くの家に間借を決め、一〇月二日にここへ引き移った。このとき、滞在費用として伊勢屋から三両ほどを借り受けている。同時に故郷に便りを出し、伊勢屋の手代が伊那に行く際に必ず返すよう、念を押している。

この年は、老中安藤信正が水戸浪士に襲われた坂下門外の変に始まり、皇女和宮と將軍家茂との婚儀、薩摩藩士が惨殺された寺田屋事件、外国人殺傷の生麦事件など、公武合体と攘夷をめぐるさまざまな出来事が、世間を賑わしていた。多勢子が京都で知り合った門人の多くは、長州藩士や薩摩藩士たちで、こうした世の中の動きを明け方までしばしば語り合っている。在京の門人を頼って、地方から出てくる者もあった。多勢

子のもとには、尊攘の志を強くいだく若者たちが、かわるがわる出入りするようになっていた。

一月の初め、江戸から新たに五人の門人が上京してきて、多勢子は彼らと意気投合したようだ。またこの頃から、多勢子の日記には「長尾ぬしの来て少しひそかことたつね度よふ有て」といった、密談を思わせる記述が現われるようになる。

尊攘派の志士に囲まれ、多勢子が実際にどのような役割を担っていたのか、日記では明示されていない。しかし、連日の外出や訪問者の記録を見れば、彼女を通して情報が行き来していたことが想像できる。公家と武士との接触は表向き禁じられており、多勢子が彼らの間をとりもつ役目を果たしていたとも考えられる。はたから見れば、多勢子は歌好きの、田舎から都見物に出てきた年配の農婦にすぎず、歌詠みをひとつの道具に、誰からも警戒されず、双方に近づくことができたのである。

一二月、江戸から平田鏡胤が京都にやってきた。師である鏡胤の上京で、多勢子の人脈はますます輪を広げ、翌文久三年（一八六三）にはその数が五〇人を超えるまでになっていた。彼らは多勢子のもとを訪れては屈託なく打ち明け話をし、多勢子もまた、足しげく鏡胤を見舞って、あれこれと任される用事に奔走した。

年が明けてから、諸大名が天皇に謁見するため御所に入るのを、たびたび目にするようになった。巷では、天誅と称する暗殺事件も頻発して、世情が不安定に動きつつあった。

一部の急進的な門人が、衝撃的な事件を起こそうと目論んでいることは、多勢子の耳にも届いていた。二月の半ば、彼女はそうした志士たちの寄り合いに誘われたが、行こうとしなかった。平田派の他の多くの門人がそうであったように、過激な運動に積極的に加担する気は持ち合わせていなかったのである。

二月二日の深夜、足利將軍家にゆかりの等持院を、九人の志士が襲

撃する事件が起きた。彼らは、ここに安置されていた足利尊氏、義詮、義満三代の木像を壊し、首を持ち出して左眼をくりぬき、三条河原にさらし者にした。脇に添えられた罪状には、「逆賊」とあり、鎌倉以来、朝廷の権威をおとした悪の元凶として、天誅を加えたことが記されていた。この事件を機に、平田一門への弾圧の手がにわかに強まった。多勢子は門人たちのはからいで長州藩邸に身を寄せていたが、外では捕らえられる者、処刑される者、拿捕を恐れて自害する者などが相次いだ。

こうした都での物騒な様相は、当然ながら故郷の伊那にも届いていた。三月の半ば、息子と中津川の市岡家の者が連れ立って、多勢子の身柄を引き取りにきた。三月二十九日、およそ半年を過ごした京都を離れるにあたり、多勢子は「古里にかへるもおしき旅衣大内山をあとに残して」と詠んでいる。やむをえないとはいえ、都を離れることに後ろ髪引かれる思いであったようすがうかがえる。

帰路は、東海道が人目にもつきやすく危険だといので、大和路をまわることになった。淀の川舟で大坂に出てから大和を抜け、伊勢神宮と熱田神宮に参拝して、多治見から中津川に出た。故郷の伊那に帰ったのは、四月の末であった。

③ 維新後の多勢子

「草莽の志士」という表現がある。吉田松陰が使い始めた言葉だというが、幕末期には在野の直情径行な若者たちがあちこちで決起し、維新へとまい進する原動力となった。そして彼らの活動を物心両面で支えたのが、各地の豪商や豪農であった。多勢子もまたそうした豪農のひとりであり、伊那に帰ってからの数年間は、頼ってくる志士たちの面倒をみてすごしている。

帰着から四年後、慶応四年（一八六八）正月に、多勢子は再び都に上った。新政府の発足と、鳥羽・伏見の戦いで勝利を聞きつけ、念願の王

政復古を見届けに来たのである。同時に、息子二人を官軍の一員として従軍させるつもりであった。また、散り散りになっていた平田門人も再会を果たした。

夏頃になると、国元の高須藩士が、多勢子を頼って上京してきた。多勢子は、都で築いた人脈を駆使して、何人もの藩士を官職へと周旋した。うわさを聞きつけ、上京してくる同郷の者はますます増えたが、目先の利に走る人々ばかりで、次第に多勢子も辟易しはじめた。故郷への便りには次のようにある。

いろ／＼の人参り何ことも出き不申こまり入候。(中略) まつ／＼ねかひ事なそも今しはらくは何も御やめのかたよろしくせんし候。京にさへ行は何も／＼出きるようふにおもひ、国よりのほり参る人には、とんとこまり申候。⁽³⁴⁾

「だれもかれも京にさえ行けば何とかなると思っっている。困ったものだ」と愚痴が綴られているが、多勢子が都への旅で得た知見や人脈が、郷里の人々に大きな期待をもって受けとめられていたということは注目し値する。

九月、元号は明治に改まった。この二度目の京都滞在中、多勢子は後々にまで語り継がれる役割を与えられた。それは門人のおつてで岩倉具視邸に入ったことである。訪問者への対応や子女の教育など、岩倉家の家政全般が多勢子の仕事であったとされ、すべてを手際よくこなす裁量に、岩倉卿も舌を巻いたといわれる。岩倉家には半年ほどいて、明治二年(一八六九)三月、天皇の東京遷幸を見送り、多勢子は再び故郷に帰った。

明治一四年(一八八一)の春、七一歳になった多勢子は、東京に居を移した岩倉卿に再び呼ばれることになった。孫の千振を司法省に登用す

るといのである。多勢子と千振は東京で生活を始めたが、そこで見たものは、古い慣習を打ち捨てて、ことごとく西洋の文物に追随しようとする人々の姿であった。

おそらく多勢子は、自分や同志が切望してきた王政への復古が、まったく思いもかけない方向へと進みつつあるのを目の当たりにして、愕然とする思いであったに違いない。千振もまた、斡旋された官職が自分には不向きであると悟り、結局わずか一年ほどで、ふたりは東京を引き揚げ、伊那へと帰った。千振は、発明されてまもない人力車に祖母を乗せて帰ろうと考えたが、西洋の文物を極度に嫌う多勢子は、歩くほうがいからと、頑としてこれを断ったといふ。⁽³⁵⁾

晩年は生まれ育った伊那で知人や親戚に囲まれて穏やかに過ごし、明治二十七年(一八九四)、八四歳でその生涯を終えた。

おわりに―旅する主体としての女性

以上、三種類の日記を用いて、近世末期の女性の旅とその背景をみてきた。それぞれが個性的な旅の記録であり、これをもって女性の旅を一概に論じるわけにはいかないが、旅の大衆化という現象への位置づけを考えるとき、さまざまな示唆を与えてくれる。

一番目の『西遊草』では、伊勢参宮を契機とした周遊の旅が普及するのにともない、女性の抜け参りを慣例化させるしくみが、すでに道中のいたるところでできあがっていたことを確認した。抜け参りという、表向きには制度に反する行為が、結果的に流動人口を増加させ、宿場や街道稼ぎを活発にしたことは確かである。女性の旅人の存在が、無視できない経済効果をもたらしていたと考えることができる。

同様のことは、二番目にとりあげた「伊勢詣の日記」でもいえる。ここで旅をした女性たちは、一般的な旅人に比してかなり裕福な層にあっ

た人々だが、そうした懐の豊かな女性客を見越した集客装置が旅先に用意されていたことを、古市遊郭での伊勢音頭を例に確認した。

最後の「旅のなくさ・都のつと」では、松尾多勢子という他に類例を見ない特殊な旅人をおして、無謀とも思える彼女の旅が、おもに実家の親戚関係とそのネットワークを土台に実行されたこと、身につけた教養をひとつの道具として、旅先の見知らぬ土地で自ら新たな人脈を築き、その人脈を故郷の人々の利用に供したことを確認した。身の危険を顧みず、密偵まがいのスリリングな旅を展開した多勢子だが、その旅が単に一個人の体験にとどまらず、最終的に地域社会に還元されたことは、旅のもつ本質的な意義を再認識させてくれる。

ここで紹介した日記に登場する女性たちは、主体的に旅を実践した人々である。数の上で男性に及ばないのは確かであるが、こうした女性の旅人の存在は、街道や宿場のあり方にさまざまな影響を及ぼしたと思われる。

明治一年（一八七八）、イギリスの女性旅行家イザベラ・バードが、日本人の通訳一人を連れて、北関東から東北地方、そして北海道を旅した。バードの旅の記録は、『日本奥地紀行』（高梨健吉訳、平凡社東洋文庫、一九七三年）として広く知られているが、江戸時代の名残が色濃く残る街道や宿場を進みながら、次のような驚きを書きとめている。

私の心配は、女性の一人旅としては、まったく当然のことではあったが、実際は、少しも正当な理由がなかった。私はそれから奥地や北海道を二〇〇マイルにわたって旅をしたが、まったく安全で、しかも心配もなかった。世界中で日本ほど、婦人が危険にも不作法な目にもあわず、まったく安全に旅行できる国はないと私は信じている。⁽³⁶⁾

日本での旅を始めたバードがまず驚愕したのは、宿の佇まいであった。「私的生活の欠如は恐しいほどで、私は、今もって、錠や壁やドアがなくとも気持よく休めるほど他人を信用することができない」とあるように、ただひとつの仕切りである「紙の窓（障子）」を始終開け閉められ、按摩や物売り、隣室の人々が代わる代わる顔を見せるような環境で眠らなければならないことに、大きな不安を覚えている。しかし、旅を続けることに、その不安が払拭されていったのである。⁽³⁸⁾

バードが実感した日本の街道における安全性は、近世以来の女性の旅と無関係ではないだろう。多くの女性の旅人を受け入れてきたということは、それだけ安全性が確保されていたことの証であろうし、またそれを維持することが、さらなる女性客の利用を招いたとも考えられる。いずれにせよ、「安全」という旅に不可欠な条件を備えていたのが江戸時代の街道であり、宿場であったとするなら、この時代の日本は世界に誇るべき成熟した旅の文化を保持していたということになる。⁽³⁹⁾

近世において確立したこうした旅の文化は、明治以降の近代化によってどのような影響を受けたのだろうか。近世に比して、近代以降の女性の旅は、まださほど発掘が進んでいない。女性の旅を検証することは、旅の文化の継承と変容を考えることでもある。そのことをふまえて、近代以降の女性の旅へと考察を進めることを、今後の課題としたい。

註

(1) 近世における女性の旅については、深井甚三が「近世中期以降の女旅・女抜け参り旅の展開と具体相―東国を中心に―」（『国史談話会雑誌』第三〇号、一九八九年）の中で、元禄期以降の関所や宿場の記録から女性による旅の展開を概観しているほか、『近世女性旅と街道交通』（桂書房、一九九五年）において、とくに女性による無手形の旅と関所抜けの実態を、史料紹介とともに詳述している。近世の女性自身が記した旅日記に関しては、柴桂子が全国各地の一八〇点余りの史料の所在を確認し、これらの分析から、女性による旅の特質を考察している（柴桂子『近世おんな旅日記』吉川弘文館、一九九六年）。また、前田淑の編

- 集により、福岡を中心とした女性の旅日記が翻刻されている(『近世福岡地方文芸芸集』・『近世女人の旅日記集』いずれも葦書房、二〇〇一年)。
- (2) この点について、山本光正は、旅日記のみでは一般庶民の女性の旅を知ることができないとし、旅日記に代わる史料の発掘と蓄積が不可欠であることを指摘している(山本光正「近世・近代の女性の旅について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一〇八集、二〇〇三年)。
- (3) 立川町史編さん委員会編『立川町史資料 第五号』(一九九三年)所収。
- (4) 『西遊草』以外にも、たとえば天保十二年(一八四一)に筑前から日光まで旅をした桑原久子の『二荒詣日記』(前田淑編『近世福岡地方文芸芸集』葦書房、二〇〇一年所収)や、久子と同行した小田宅子による『東路日記』(前田淑編『近世女人の旅日記集』葦書房、二〇〇一年所収)、安政六年(一八五九)に常陸から京都に旅をした黒沢ときによる『上京日記』(深井甚三著『近世女性旅と街道交通』桂書房、一九九五年所収)、文久二年(一八六二)に羽後の本荘から伊勢参宮の旅をした今野於以登による『参宮道中諸用記』(『本荘市史 資料編 四卷』一九八八年所収)などに、無手形による関所抜けの旅の実態が記録されている。
- (5) 本稿では、清河八郎著・小山松勝一郎校注『西遊草』岩波文庫(一九九三年)からの引用とする。
- (6) 清河八郎著・小山松勝一郎校注『西遊草』岩波文庫、一九九三年、一八頁。
- (7) 清河八郎、前掲書、七八頁。
- (8) 清河八郎、前掲書、八〇頁。
- (9) 清河八郎、前掲書、九九頁。
- (10) 清河八郎、前掲書、三九一頁。
- (11) 清河八郎、前掲書、四〇七頁。
- (12) 清河八郎、前掲書、四七三頁。
- (13) 深井甚三『近世女性旅と街道交通』桂書房、一九九五年、四二頁。
- (14) 清河八郎、前掲書、四一頁。
- (15) 清河八郎、前掲書、五二六頁。
- (16) 山本光正「近世・近代の女性の旅について―納経帳と絵馬を中心に―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一〇八集、二〇〇三年。
- (17) 国立国会図書館蔵『伊勢まうてのにつき』(写本。翻刻は『江戸期おんな考』第三号(桂文庫、一九九二年)に収録。解説は片倉比左子。本稿での引用は、この翻刻文による)。
- (18) 竹内利美他編『日本庶民生活史料集成 第二〇巻』(三書房、一九七二年)所収。
- (19) 宇治山田市役所編『宇治山田市史 上巻』一九二九年、六七五頁。
- (20) 引用は註(18)に同じ。
- (21) 清河八郎、前掲書、一二三頁。
- (22) 清河八郎、前掲書、一二三頁。
- (23) 宇治山田市役所編『宇治山田市史 上巻』一九二九年、六七七頁。
- (24) 野村可通『伊勢の古市あれこれ』三重県郷土資料刊行会、一九七六年、一一〇頁。
- (25) 宇治山田市役所編『宇治山田市史 上巻』一九二九年、六七四頁。
- (26) 筑前の小田宅子が天保十二年(一八四一)に旅をした際の記録『東路日記』(前田淑編『近世女人の旅日記集』所収、葦書房、二〇〇一年)に記載がある。
- (27) 「旅のなぐさ」と「都のつと」は別の日記であるが、内容に連続性があり、「旅のなぐさ・都のつと」(市村威人校訂、下伊那郡教育会発行、一九四四年)として翻刻されているので、一連のものとして扱う。本稿での引用もこの翻刻による。なお、同日記は下伊那郡役所編『下伊那郡誌資料 中巻』(歴史図書社、一九七八年)にも収録されている。
- (28) 「松尾多勢子伝」『下伊那郡誌資料 中巻』、一九七八年、九一〇頁。
- (29) アン・ウォルソール『たをやめと明治維新・松尾多勢子の反伝記的生涯』ペリカン社、二〇〇五年、三七頁。
- (30) アン・ウォルソール、前掲書、四二頁。
- (31) 松尾家における養蚕業の位置づけと多勢子の役割については、アン・ウォルソールの前掲書、八七―九一頁で分析がされている。
- (32) 「多勢子遺稿」『下伊那郡誌資料 中巻』、一九七八年、一七三頁。
- (33) 「旅のなぐさ・都のつと」市村威人校訂、下伊那郡教育会発行、一九四四年、一頁。
- (34) 「多勢子遺稿」『下伊那郡誌資料 中巻』、一九七八年、一九一頁。
- (35) 「松尾多勢子伝」『下伊那郡誌資料 中巻』、一九七八年、二〇一―二二一頁。
- (36) イザベラ・バード(高梨健吉訳)『日本奥地紀行』平凡社(東洋文庫)一九七三年、四八頁。
- (37) イザベラ・バード、前掲書、四七頁。
- (38) これに関連して、宮本常一は「プライバシーがほとんど問題でなかったということが、逆にお互いが安心して安全な生活ができたということなのです。例えば女が一人で旅ができるということは、プライバシーをわれわれがそれほど尊ばなくてはならないようなことがなかったからではないか。われわれの生活を周囲から区切らなからなければならない時には、すでにわれわれ自身の生活が不安定になっていることを意味するのではないかと思うのです」(『イザベラ・バードの『日本奥地紀行』を読む』平凡社ライブラリー、二〇〇二年、七三頁)と述べている。
- (39) 江戸時代後期における旅の「安全性」については、櫻井邦夫が、道中日記の分析による手荷物一時預けと輸送システムの考察から、「一八世紀以降の近世社会とは、このような利便性の高いシステムが構築された時代、旅人と茶屋や旅館、運搬人などとの相互の信頼関係に基づく安全・安心な社会、業者同士のネット

ワーク化、などが存在した、成熟したものではなかったのか」と述べている
(櫻井邦夫「近世の道中日記にみる手荷物の一時預けと運搬」『大田区立郷土博物館紀要 第九号』一九九九年、一一七頁)。

(旅の文化研究所、国立歴史民俗博物館展示プロジェクト委員)
(二〇〇九年五月八日受付、二〇〇九年九月二五日審査終了)

Travel of Women in the Late Early Modern Period Observed in Travel Diaries: A Study on Its Positioning Relative to the “Popularization of Traveling”

YAMAMOTO Shino

Recent analyses of travel diaries and painting materials have clarified the existence of many women who enjoyed traveling independently as travel became popular in the late Edo Period. However, because the reality of such female travel is not reflected in general historical materials such as the records of vicarious visits by Ko religious groups, it is currently difficult to gain a systematic understanding of the travel of women in the Edo Period. This article studies a system that supported the travel of women through its reality as described in personal travel diaries. The travel diaries selected are (1) “Saiyuso” written by Hachiro Kiyokawa, (2) ‘Diary of a Visit to Ise Shrine’ written by Ito Nakamura, and (3) ‘Tabino-nakusa, Miyakono-tsuto’ written by Taseko Matsuo.

Travel diary (1) is a record of the time when Hachiro Kiyokawa, known as a member of an antiforeigner faction in the late Tokugawa Period, visited the Ise shrine with his mother without written permission. It describes how illegal actions for passing through checking stations were openly conducted as a kind of Kaido (highway) moneymaking scene. It also indicates that the routine disapproval of women traveling, as round trips commencing with a visit to Ise shrine became popular. Travel diary (2) is a diary of the time when the wife of a wealthy merchant family in Edo visited the Ise shrine with her acquaintance family. Especially through the record of watching the Ise dance in the Furuichi licensed quarter, we can observe how the women travelers were entertained and sense the solid financial backing. Travel diary (3) is a record of the time when Taseko, the wife of a wealthy farming Matsuo family in Shinshu Ina and later a disciple of Hirata Kokugaku in the late Tokugawa period, made a trip to Kyoto amidst the turbulence and stayed there for about half a year. It is a unique but remarkable example; showing how she used her cultural accomplishments as a tool to form her own connections unaided in a strange land and use them for people back home.

The existence of female travelers seems to have had various influences on the whole concept of Kaido and Shukuba post stations. In particular, the safety of the Japanese Kaido, as described clearly in later years by the British female tourist Isabella Bird, is inseparable from the travel of women. To reevaluate the Japanese traveling culture in the late Edo Period, the travel of women must be further studied.

Key words: traveling of woman in the Tokugawa government, traveling diary, disapproval traveling, Ise dance, *matsuo taseko*
